

The Baseball Hall of Fame and Museum

公益財団法人 野球殿堂博物館

2026年野球殿堂入り通知式

館長 庄司正信

1月15日(木)野球殿堂博物館を臨時休館にし、午後6時15分より東京ドームホテルB1大宴会場「天空」において2026年野球殿堂入り通知式を開催いたしました。

コロナ禍以降はオンラインでの開催とさせていただいておりましたが、今回は2020年以来久しぶりにメディアや維持会員の皆様を招いての通知式となりました。

競技者表彰のエキスパート表彰は、北海道日本ハムファイターズを日本一、日本代表の監督として侍ジャパンを2023年のWBCで世界一に導いた栗山英樹さんが選出されました。なお、残念ながらプレーヤー表彰、特別表彰の該当者はありませんでした。

榊原定征理事長から本年の野球殿堂入りの発表がなされた後、星野和明競技者表彰委員会代表幹事及び井原敦特別表彰委員会議長より、それぞれの委員会での選考過程について報告がありました。

続いて、殿堂入り通知書の授与、野球殿堂入りされた栗山さんの挨拶が行われました。栗山さんは、自分が殿堂入りしていいのかという謙虚なお気持ちと、現役時代に指導を受けた内藤博文コーチを始めお世話になった方々への感謝を話し、「この殿堂入りは、これからの野球界のためにしっかり働きなさいということだと思っている」と決意を述べられました。

続いて、球心会の代表で福岡ソフトバンクホークスの王貞治会長(1994年殿堂入り)と北海道日本ハムファイターズの教子でロサンゼルス・ドジャースの大谷翔平選手からのお祝いメッセージの披露がありました。王さんは、「世界に日本野球の強さを示してくれた功績を考えれば殿堂入りは当然だ。次の世代に野球の魅力を伝える役割を期待している」とエールを送りました。大谷さんからは、お祝いの言葉と、「栗山さんのご功績とお人柄が歴史に刻まれることを嬉しく思う」とのメッセージでした。

ゲストスピーチでは、栗山さんのあこがれのプレーヤーで前 読売ジャイアンツ監督の原辰徳さん(2018年殿堂入り)より、栗山さんの現役時代のプレーぶりの紹介と「努力と経験が人心掌握術、栗山野球を確立させた。素晴らしい野球人で、人格者である」とお祝いの言葉をお話いただきました。

最後に殿堂入りされた栗山さん、ゲストスピーカーの原さん、榊原理事長を交えた記念撮影を行いました。控室では、原さんが栗山さんにお祝いのプレゼントを渡すなど、殿堂入りを喜び合っていました。栗山さん、この度は野球殿堂入り誠にありがとうございます。



左から：榊原理事長、栗山英樹氏、原辰徳氏 写真提供：ベースボール・マガジン社

2026年野球殿堂入り

競技者表彰委員会

第66回競技者表彰委員会は、昨年12月に委員による投票を行い、今年1月6日に開票作業を行った。

プレーヤー表彰の候補者は、現役引退から5年経過かつ20年以内の有資格者の中から、競技者表彰委員会幹事会が選んだ23人の候補者を対象に、15年以上の野球報道経験を持つ委員が最大7人連記で投票を行った。委員総数は346、投票委員数は341、有効投票数も同じく341だった。

当選には有効投票数の75%以上の得票が必要で、今回は256票。残念ながら今回は必要得票数に達した候補者はいなかった。競技者表彰がプレーヤー表彰とエキスパート表彰に分かれた2008年以降、プレーヤー表彰で当選者が出なかったのは、2020年、2021年に次いで3度目となる。

今回の最多得票は川相昌弘氏の254票で、得票率74.5%。当選までわずか2票、0.5%及ばなかった。川相氏は前回の投票で、殿堂入りしたイチロー氏と岩瀬仁紀氏に次ぐ211票（得票率60.5%）を集めており、今回も票の上積みこそあったものの、惜しくも落選。川相氏は2012年に候補者入りしてから15年目。規程により次回からプレーヤー表彰の対象から外れることになった。また、得票率が3%未満だった五十嵐亮太氏も、規程により次回の候補者から外れる。

エキスパート表彰では、日本ハムと侍ジャパンで指揮を執った栗山英樹氏が選出された。投票権を持つ委員は、すでに殿堂入りされている方と競技者表彰委員会の幹事及び野球報道経験30年以上の方々。今回の委員総数は159で、投票委員数は151、うち有効投票数は150。幹事会が選んだ20名の候補者を対象に、最大6人連記で投票を行った。

当選には75%以上の得票が必要で、今回は113票。栗山氏は得票率76.0%の114票を獲得した。栗山氏は2023年に候補者入りしてから4年目の殿堂入り。前回は殿堂入りした掛布雅之氏に次ぐ85票（得票率58.6%）を集めており、今回も票を大きく上積みして当選圏内に入った。

栗山氏は国立の東京学芸大出身で、ヤクルトの入団テストに合格して1983年ドラフト外でプロ入りした異色の経歴を持つ。ヤクルトでは外野手として7年間プレー。メニエル病の影響もあり、90年に29歳の若さで現役生活を終えた。

引退後はテレビのスポーツキャスターなどを長く務め、2012年に日本ハムの監督に就任。指導者経験がない

まま指揮官となる、こちらも異色の経歴ながら、大谷翔平（現ドジャース）の二刀流挑戦を後押しすると同時に、10年間の監督生活でリーグ優勝2回、日本シリーズ制覇1回の成績を残した。

日本ハム監督退任後は野球日本代表侍ジャパンの監督として、2023年のWBCで世界一に導いた。

栗山氏は通知式のスピーチで「まさかテスト生でプロ入りした自分がこういった長きにわたって野球ができるとは思っていませんでした。正直、自分みたいな人間がそこに入っていいのか、思いは未だにあります。ただ、この賞はこれからの野球人のためにしっかり働きなさいということだと思っております」と喜びを語った。



栗山 英樹 氏

栗山氏 通算成績	
NPB実働7シーズン	494試合
1204打数	336安打 7本塁打 67打点 打率.279
監督成績	
実働10年	1410試合 684勝 672敗 54引分 勝率.504
パ・リーグ優勝2回 (2012、2016)	
日本シリーズ優勝1回 (2016)	

ゲストスピーカーとして通知式に出席したのは、栗山氏にとって少年時代のあこがれの存在で、同じ侍ジャパン監督として世界一に輝いている原辰徳氏。祝福のスピーチで原氏は「(殿堂入りは) なるべくしてなった。素晴らしい野球人であり、人格者」と讃えた。また、同じくWBC世界一指揮官の王貞治氏も「栗山さんと大谷選手の絆は特別なもの」と祝福のメッセージ。大谷選手からも「栗山監督に指揮していただいたファイターズでの5年間、そして2023年のWBCでの思い出は僕の大切な財産になっています」と、感謝と祝福のメッセージが寄せられた。

今回は当選者がいなかったプレーヤー表彰では、次回から横浜高で甲子園春夏連覇、西武、レッドソックスな

2026年野球殿堂入り

どで日米通算170勝の松坂大輔氏、阪神、ロッテで通算2099安打の鳥谷敬氏らが殿堂入りの有資格者に。今回の得票率が高かった宮本慎也氏（68.0%）、松井稼頭央氏（65.1%）らとともに注目を集めそうだ。

エキスパート表彰では今回、岡田彰布氏と長池徳士氏が、ともに95票（得票率63.3%）で次点。こちらも次回の殿堂入りが期待される。

競技者表彰委員会幹事代表幹事 星野 和明

写真提供：ベースボール・マガジン社

特別表彰委員会

第65回特別表彰委員会は、1月8日に東京ドームホテルで開催され、昨年の候補者から野球殿堂入りした富澤宏哉氏を除く10名の候補者で選考が行われた。当日の委員会には委員14人全委員が出席。表彰委員会規程第25条が定める委員半数以上の出席となり委員会は適正に成立した。

昨年来の候補者は、

- ①箕島高校監督として春夏連覇を含む甲子園通算35勝を挙げた、尾藤公氏
 - ②記録記者として活躍され、「得点圏打率」などを考案された、宇佐美徹也氏
 - ③ロス五輪でコーチとして金、ソウル五輪では監督として銀メダルを獲得された、鈴木義信氏
 - ④野球評論家の草分けで、ラジオやテレビで活躍、多くの著作を残された、大和球士氏
 - ⑤監督としては早稲田実業で選抜優勝、中央大学で8度の東都大学リーグ優勝を飾られた、宮井勝成氏
 - ⑥ドラフト制度導入にも尽力された第6代コミッショナー、金子鋭氏
 - ⑦東洋大学監督として東都大学リーグ5連覇を含むリーグ542勝を挙げられた、高橋昭雄氏
 - ⑧野球伝来を明治5年と提唱した日本野球史研究の第一人者だった、斎藤三郎氏
 - ⑨嘉義農林の指導者となり、チームを春一回、夏4回甲子園に導かれた、近藤兵太郎氏
- 本年からの新しい候補者はお一人で、
- ⑩大昭和製紙監督で都市対抗優勝に導いた後、早大監督で早大初の4連覇を達成した、野村徹氏

表彰委員会規程24条では、「候補者選考の要件」として7項目のジャンルで顕著な功績をあげた者を規定している。その内容は、(1)アマチュアの選手、(2)審判員、(3)選手の指導、後進の育成、技術の発展、(4)日本野

球の組織や大会の発展、(5)国際交流を通じた野球振興、(6)野球の底辺拡大、(7)野球文化の発展、魅力の発信—となっている。

今年の候補者は、社会人、大学野球、高校野球、国際大会で指導者として実績を上げられたり、組織運営でご尽力されたり、記録、評論、歴史研究で功績を残された10人の方たちである。まさに「要件」通りに様々なジャンル、それぞれの立場から野球界に貢献された皆さんである。

選考の議論では、まず候補者全員の履歴・球歴が改めて紹介され、委員がそれぞれに意見が述べた。

14人の委員も元プロ野球選手、各階層の元アマチュア野球指導者、野球史研究者、スポーツ記者、野球団体関係者など様々な経歴の野球人であり、活発な議論が繰り上げられた。

その後に「3名以内を連記する」投票が行なわれた。殿堂入りに必要な得票数は規程で75%の11票。結果は、一回目の投票で該当者が定まらなかった。

- ①宇佐美徹也氏 8票
- ②鈴木 義信氏 8票
- ③大和 球士氏 6票（以下省略）

表彰委員会規程第26条（2）により得票数上位三名による再投票が行われた。再投票は「2名以内連記」で必要な投票数は11票。規程で3回目の投票は行わない。

その最終結果でも票が分かれた。

- ①宇佐美徹也氏 9票
- ②鈴木 義信氏 9票
- ③大和 球士氏 4票

2011年以来、15年ぶりの「該当者なし」となった。

特別表彰の目的は、野球の発展・振興に、多大な功績を残された功労者を掘り起こし、殿堂入りで顕彰することである。この数年を振り返ると、審判、作曲家、大学野球関係者、作家と結果的にバランスよく様々な分野の功労者を殿堂にお迎えしてきた。ただ、これまでに特別表彰委員会に携わった学識経験者から「文化人は選手・監督と一緒に評価ができない」と指摘する声もあった。

今年の結果は「該当者がいない」ことではない。異なる分野それぞれに殿堂入りにふさわしい功労者がいて、票が分かってしまったのだ。改めて選考の難しさを知らされた。

特別表彰委員会議長 井原 敦

殿堂入りの人々を語る(78)



吉田義男氏

野球とともに生きた父

八田智子 (1992年野球殿堂入り 吉田義男 長女)

130歳まで生きて笑っていた父は、2ヶ月ほど治療に専念していましたが目を覚ますことなく2025年2月3日、91歳の生涯を終えました。入院する2日前には、いつものお仲間とゴルフを楽しみ、また2025年のカレンダーにはいくつもの予定が書き込まれ、きっと本人が一番想定外の出来事だったのではと思いますが、自宅に戻り安らかな寝顔から静かな安堵が伝わってきました。

父は36歳で現役を引退しました。当時は私も妹も幼少期だったため「今牛若丸」と呼ばれた守備や走塁の記憶が乏しかったのですが、亡くなったあとに流れる映像を見て、子供の頃にタイムスリップしたような感覚になりました。

父は試合が終わって帰宅するとバットの素振りをしてから家の中に入るのが日課で、休みの日は必ずグローブとスパイクをクリームでピカピカに磨き上げ、床の間に置いていました。道具を大切にしている父の姿を鮮明に覚えています。

休日は普通のご家庭と違いましたが、時間がある時にはかつて甲子園球場の向かい側に存在した「甲子園阪神パーク」へよく連れて行ってくれました。また私の小学校の参観日に来てくれたり、妹の幼稚園の運動会では徒競走に参加して本気で1位になっていました。今思うと、父なりに家族のために一生懸命努力してくれていたんだと、感謝です。

月日が経ち監督時代。監督候補に父の名前が上がると、正直家族は戦々恐々でした。一応打診はありましたが、本人の中では決定事項なので仕方なく。父よりも母の苦労は尋常ではなかったように思います。当時、母は取材で「主人は球団からの預かりものです」と言っていたのですが、阪神タイガースという人気球団ならではの重圧を感じていたのでしょう。父が心身ともに過酷な任務に専念できたのは、母から父への賜物だったと思います。そんな大変な仕事を後に2回も引き受けた父に母はなんと感じたのか聞いてみたかったです。

監督としての役目がひと段落し、母への感謝を込めて慰労の旅先に選んだ地がフランスでした。母も初めてのヨーロッパに大喜びで在仏の友人と旅行を満喫していたところ、好奇心旺盛な父はフランス野球のチーム監督を承諾し帰国。慰労の旅のはずが、新たなミッションに挑むことになりました。新たなミッションの条件は全て自己負担。言葉も生活習慣も未知な土地で、“野球を広めたい”という父のポジティブ精神を尊敬します。

フランスでの野球指導に際して、決して父一人の力で成し得たものではなく、長きにわたり多くの方々のご協力があったこそ現在に至っているのだと、父はいつも「ありがたいことや」と感謝しておりました。父の思いは現在も引き継がれ、訃報を聞いたフランス野球連盟会長のディディエ・セミネ氏と門下生のジャメル氏が急遽フランス・パリから葬儀に駆けつけてくださいました。また、選手の皆様が黙祷を捧げてくださったと伺いました。

2024年8月、甲子園球場100周年セレモニーで始球式を拝命したのを野球人生の集大成と決めたようで、始球式が終わった後「これで、もうまいや」と呟いていました。時代が移り変わることを父が一番実感していたと思います。そんな父は阪神タイガース最速リーグ優勝を見ることなく旅立ちました。

4月27日、父の追悼試合を観戦させていただいた際、孫たちが「おじいちゃまってすごかったんだね」と驚いていました。「何事にも時があり天の下の出来事には時がある」と聞いたことがありますが、父と苦楽を共にした母も同年9月27日に父の元へと旅立ちました。

野球殿堂入りをさせていただき34年、父を支えてくださった皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



こんにちは図書室です



「サン写真新聞とサン大会」

今回は、「サン写真新聞」についてご紹介します。「サン写真新聞」は、サン写真新聞社より発行されていた毎日新聞系の新興紙で、『毎日新聞百年史1872-1972』（毎日新聞社 昭和47（1972）年2月21日発行）によると、戦後の昭和21（1946）年4月18日に創刊され、写真を前面に押し出した紙面が特徴でした。

右の写真は、それまで1リーグだったプロ野球がセ・リーグとパ・リーグに分かれた時の会議の様子の写真です。この会議は昭和24（1949）年11月26日に東京會館別館で行われた「連盟代表者会議」で、写真を見ると、奥は阪急、南海、大映、東急の4球団、手前は巨人、阪神、中日、太陽の4球団、左側には旧日本野球連盟の正力松太郎（1959年殿堂入り）、鈴木惣太郎（1968年殿堂入り）、鈴木龍二（1982



当室所蔵の新聞記事スクラップより

年殿堂入り)の3つのグループに分れています。11月27日付のサン写真新聞は、この写真を一面に使い、「太平洋リーグ誕生 日本野球遂に分裂」、「複雑な3つの表情」と見出しをつけました。

当室が所蔵する日本プロ野球の2リーグ制決定の記事を集めた新聞記事スクラップには、この写真が「Sun写真新聞は得意の写真をのせて」というコメントともに貼られています。

サン写真新聞社は社会人野球の大会を主催していました。「サン大会」と呼ばれたこの大会は、昭和21年の都市対抗野球大会終了後の8月末に、後楽園球場にて第1回大会が開催されました。決勝戦はいすゞ自動車と藤倉電線で、いすゞ自動車では荻田久徳二塁手（1969年殿堂入り）、藤倉電線では吉田正男投手（1992年殿堂入り）が出演し、10対4でいすゞ自動車が優勝しました。第2回大会も8月末に開催されましたが、第3回大会は3月に行われました。それ以降は春先に開催され、「サン大会」は社会人野球シーズンのスタートを飾る春の大会と言われるようになります。サン写真新聞は昭和35（1960）年3月31日付をもって休刊しましたが、その後も大会は継続され、現在は「JABA東京スポニチ大会」として今年80回目を迎え、3月7日に神宮球場などで開幕します。

当室所蔵のスクラップブックや「サン写真新聞 野球特別号」は閲覧することができます。

司書 永沼里菜子

■図書室の開室時間

図書室は事前予約制です。詳しくは、<https://bml.opac.jp/opac/Top> をご確認ください。

知ってほしいこんな資料(103)

沖縄尚学・夏の甲子園初優勝ユニホームとサイン色紙

2025年夏、第107回全国高等学校野球選手権大会(夏の甲子園)で、沖縄県代表の沖縄尚学高等学校が決勝戦で日大三高(西東京)を3対1で下し、悲願の夏初優勝を遂げた。この快挙により、夏の全国大会における沖縄県勢の優勝は2010年の興南高等学校以来、15年ぶり2度目となった。

このたび沖縄尚学高等学校野球部より、ユニホームと、部員によるサイン色紙をご寄贈いただいた。現在、当館にて集合写真と共に展示を行っており、多くの来館者の目に触れている。

沖縄では、甲子園で県代表校が試合を行う際、「道路から車が消える」とまで言われるほど県民の関心が高く、実際、沖縄尚学が決勝戦を戦った当日には、那覇市内を走る国道58号線においても交通量が大幅に減少し、街が一時静まり返ったという。それほどまでに多くの県民がテレビ中継に注目していたことがうかがえる。

那覇市内の市場や商店街では、試合当日に店頭テレビの前に人々が集い、打線が得点を重ねるたびに拍手と指笛が響き渡る。勝利の瞬間にはカチャーシー(祝いの舞)も踊られ、街全体が一体となって喜びを表現する。こうした報道(注1)からも、高校野球が沖縄の人々にとって、いかに心の支えとなっているかが読み取れる。

高校野球は、全国的に見ても単なる競技を超えた文化的存在であるが、沖縄において、さらに異なる意味合いを帯びた特別なものとして人々の心に根付いている。こうした状況の背景について沖縄県立博物館 外間一先氏(当時)は下記のように述べている。

沖縄は「戦後は政治上・行政上、本土から分離されてアメリカの施政下におかれ、日本の主権の及ばない地域となり、外国同然の取り扱いを受け、精神的に疎外感を招く原因になっていた」「一方で、日本本土は、高度経済成長を遂げた。こうした落差を埋めたのが、高校野球だったといえるであろう。(中略)高校野球を通して県民はサクセスストーリーを経験した。」(注2)。

野球殿堂博物館では、2010年代より高校野球に関する資料、とりわけユニホームを中心とした資料の収集を進めてきた。2015年の「高校野球100年」を記念した特別展を契機に、常設展示「高校野球コーナー」において全国大会優勝校のユニホームを毎年収集しており、その後も各地域や時代を代表する高校野球資料の収集・展示を継続して行っている。

本資料は、こうした当館の高校野球資料収集の流れの中に位置づけられるものであると同時に、沖縄尚学の夏初優勝という歴史的瞬間を伝える資料である。そこには勝利の記録だけでなく、沖縄の高校野球が地域とともに歩んできた歴史と、人々の記憶が重ね合わされている。本資料を通じて、沖縄における高校野球文化の現在地を感じ取っていただきたい。

学芸員 太田若葉



(注1)「沖縄尚学の甲子園Vに沸く県民 道路から車が消えた? 歓喜の瞬間、指笛とカチャーシー」沖縄タイムスプラス2026年1月4日閲覧(<https://x.gd/z1N5n>)

(注2)外間一先「高校野球と沖縄『熱闘高校野球本気の夏100回目』展より」『沖縄県立博物館・美術館、博物館紀要 第12号別刷』(2019年3月29日)

野球殿堂博物館 トピックス

企画展「野球報道写真展2025」

会期 2025年12月13日(土)～2026年2月1日(日)

主催 公益財団法人 野球殿堂博物館、東京写真記者協会 協力 一般社団法人 日本野球機構、一般財団法人 全日本野球協会

東京写真記者協会との共催により、今回で11回目となる企画展「野球報道写真展2025」を開催しました。同協会加盟各社のカメラマンが撮影した、2025年シーズンのプロ野球やアマチュア野球、MLBなどのハイライト69点を展示しました。ファン投票企画「ベストショット オブ ザ イヤー」は近日発表予定です。

また、過去10回の大賞作品や関連資料を展示した「ベストショット オブ ザ イヤー2015～2024」を同時開催しました。



企画展「野球報道写真展2025」



「ベストショット オブ ザ イヤー2015～2024」

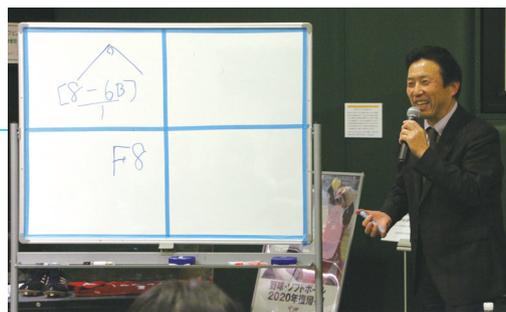
■野球の学校2025

公式記録員が教える「NPB式スコアの付け方」教室 (中級編・記録に関する規則編)

講師 一般社団法人 日本野球機構 記録部長 山川誠二氏

日時 2025年12月20日(土) 17:30～19:00

NPB記録部長の山川誠二氏をお迎えして開催した中級編で、公認野球規則の「9.00記録に関する規則」をテーマとして、安打、盗塁、失策などの記録の判断についても解説していただきました。



2026年 NPB新人選手研修会 博物館見学

日時 1月9日(金)

NPB新人選手研修会に先立ち、新人選手、審判員ら119名が当博物館を見学しました。企画展「野球報道写真展2025」で展示中の侍ジャパンU-18集合写真に写っている千葉ロッテマリーンズの石垣元気、奥村頼人両投手から、パネルにサインをいただきました。



千葉ロッテマリーンズの石垣元気、奥村頼人両投手



見学の様子

展示のお知らせ

WORLD BASEBALL CLASSIC 侍ジャパン、世界一への挑戦2026

会期：2月23日(月・祝)～5月6日(水・休)

会場：企画展示室、イベントホール

「2026 WORLD BASEBALL CLASSIC」開催に合わせ、2006、2009、2013、2017、2023年の過去5大会の記録と記憶をたどり、今大会に出場する野球日本代表「侍ジャパン」を応援する企画展を開催します。20年前の第1回大会から毎回收集している関連資料(2006、2009、2023年優勝トロフィー、各大会ウイングボール、中心選手の使用用具等)を多数展示する予定です。

※2009、2023優勝トロフィーは、1次ラウンドプールC開催期間中、当館での展示を休止する日があります。

詳細は後日ホームページに掲載します。

※会期初日の2月23日(月・祝)は11:00開館となります。



2023年 優勝トロフィー

展示のお知らせ

「第10回 野球で自由研究! コンテスト」作品展

会期：3月15日(日)～4月5日(日)
会場：野球殿堂ホール

2025年に小学生を対象とした「第10回 野球で自由研究!コンテスト」(主催：公益財団法人野球殿堂博物館、協力：一般社団法人日本野球機構、株式会社 NPBエンタープライズ)を開催しました。2016年よりスタートし、今回で10回目を迎えました。

2025年8月1日(金)～11月14日(金)の期間、野球をテーマとした自由研究の作品を募集したところ、162作品の応募がありました。山中正竹氏(2016年殿堂入り、一般財団法人全日本野球協会会長)、平田稔氏(一般社団法人日本野球機構野球振興室長)、栗山英樹氏(2026年殿堂入り、北海道日本ハムファイターズチーフ・ベースボール・オフィサー)、後藤正彦氏(国士舘大学教授)、庄司正信館長の5名による審査の結果、受賞作品が決定しました。

受賞作品の発表と受賞者への表彰式を3月15日(日)に行い、同日より、受賞作品を中心に子どもたちの力作・大作を展示する「第10回 野球で自由研究!コンテスト」作品展を殿堂ホールにて開催する予定です。ぜひご覧ください!



野球殿堂博物館 維持会員 (2026年1月31日現在・順不同・敬称略)

2025年9月1日以降、維持会員にご入会、または維持会費をご入金いただいた皆様です。有難うございます。今後ともよろしくお願い致します。

《法人・一般会員 -5年未満-》株式会社エーストレーディング

《個人・一般会員 -5年未満-》宗像信大、持田重人、柿崎和哉、小池一利、沼山尚一郎、山本将大、木村祐麻

《ジュニア会員》梅原瑠生

博物館からのお知らせ

▶博物館公式グッズ/新商品のご案内

●野球守(青×緑)

販売価格：850円(税込)

新色の「青×緑」を販売開始しました。「野球守」は…「ケガをしないよう」、「野球が上手になるよう」、「野球の試合に勝てるよう」等、みなさまの野球を応援するお守りで、袋の中にはグローブの革で作られたお守りが入っています。また、当館入口に返納箱を設けておりますので、以前お買いいただいた野球守がございましたら、いつでもお納めください。



●マグカップ(スカイ)

販売価格：各1,500円(税込)

新色のスカイが登場しました。バットとボールをモチーフにした、当館オリジナルの商品です。重ねられるスタッキングタイプになります。レング色もありますので、好きな色をお選びいただけます。※この商品は、一つ一つ手作業で色を塗布しております。そのため、多少色合いが異なる場合がございます。



▶訃報

1999年殿堂入り・広瀬叔功氏が2025年11月2日に逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

博物館のご案内	場所	東京ドーム21ゲート右
	開館時間	10:00～17:00(最終入館16:30) ※東京ドームでのプロ野球開催日は、18:00閉館(最終入館17:30)
	入館料	大人 800円 小・中学生 200円 高・大学生 500円 65歳以上 500円
	休館日	月曜日(祝日、東京ドームでの野球開催日、春・夏休み中は開館)、年末年始(12月29日～1月1日)
	※休館日及び開館時間に変更する場合がございますので、事前に当博物館ホームページにてご確認ください。	

●編集後記 今年の殿堂入り通知状は、多くの方が見守る中、開催することができました。ご協力いただきました皆様、有難うございました。

野球殿堂博物館 Newsletter 第36巻 第1号

2026年2月20日発行

編集・発行 公益財団法人 野球殿堂博物館
〒112-0004 東京都文京区後楽1-3-61
Tel 03(3811)3600 Fax 03(3811)5369
<https://baseball-museum.or.jp/>

